

ITマネジメントのための 「アプリケーションポートフォリオ管理」

従来、アプリケーション資産の評価をわかりやすい形で行うことは難しいとされてきた。しかし欧米ではいま、アプリケーション資産を客観的な方法で評価する「アプリケーションポートフォリオ管理システム」(以下、APM)が注目され、導入も進んでいる。本稿では、ITマネジメントの新しい基盤技術とも言えるAPMの概要とその導入のポイントについて解説する。

ソースコードの解析に基づくAPM

APMとは、プログラムソースを解析することによって、アプリケーション資産を定量化・可視化し、適切な品質評価やアウトソース管理レベルの向上に結びつけるマネジメントシステムである。

従来、プログラムソースの解析は、システム開発者のための技術であり、システム開発に習熟していなければできないと考えられてきた。しかしAPMの出現によって、CIO(最高情報責任者)やPM(プロジェクトマネージャー)のようなITマネジメント層の判断を支える技術とも言えるようになった。

APMは、アプリケーション資産の内部構造を、客観的な数値とわかりやすいグラフで表す。異常な数値は、プログラム構造に何らかの問題を抱えていることを意味し、開発コストに影響があることを予測させる。また、重要度別に色づけされたレーダーチャートや

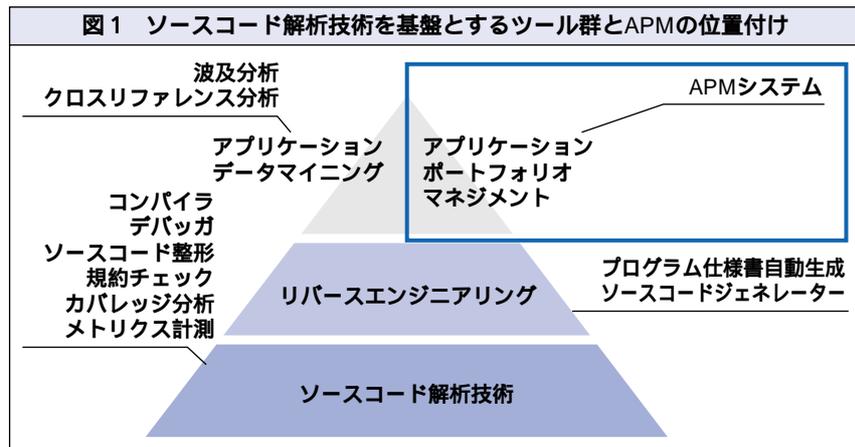
ヒストグラムは、数値のままではぼんやりとしか見えなかったアプリケーション資産の品質特性をはっきりと浮かび上がらせる。

APMは、システムの良し悪しを表すのに、難しいシステム用語(プログラム言語)ではなく、わかりやすいビジネス指標(期間平均や構成比率など)を用いる。CFO(最高財務責任者)が財務諸表を見て会社の健全性を評価するように、CIOはAPM定量評価レポートを見てアプリケーション資産の健全性を評価できるようになる。

欧米でのAPMの導入

フランス第2位の移動体通信事業会社SFR Cegetel社では、APMデータベースに蓄積さ

図1 ソースコード解析技術を基盤とするツール群とAPMの位置付け



れたプログラム規模、複雑度、結合度といったメトリクス（尺度）をもとに、プログラム開発工数の妥当性を評価したり、保守運用が困難となるような複雑なプログラムの発生を防いだりすることに成功した。APMを活用することで、アウトソーシングによって失われていた情報システムマネジメントの主導権をユーザー側に取り戻したものと言えよう（<http://www.castsoftware.com/Customers/PDF/SFRCEgetel.pdf>）。また米国では、顧客満足度の向上のため、また重要な顧客資産を預かっている自らの責務としてAPMを利用しているシステムインテグレーターもある。顧客のアプリケーションに対するプログラム修正や機能追加が発生した場合、前回よりもアプリケーション品質が下がっていないことを、APMで証明するためである。

APM導入を成功させるポイント

APMの導入を成功させる最重要ポイントは、APMによって得られる数値をどのように具体的な行動につなげるかということである。APMは、ソースコードを規模、複雑度、規約順守度といった観点で客観的な数値に変換し、アプリケーションをランクづけする。しかし、それだけでは現状の改善にはつながらない。必要なのは、これらの数値を開発工数、不具合件数、画面参照回数、保守人員数、年間人件費といったデータと突き合わせることである。たとえば、APMによって規模も複

雑度も小さいと判明したアプリケーションに対して保守人員数が多すぎないか、年間累計で不具合件数が異常ではないかといった点を検証するのである。

ITマネジメントの基盤技術として

日本でも、近年APMに類似したサービスが提供されはじめている。しかしそれらは、レガシーマイグレーション（大型汎用コンピュータのシステムを更新すること）のためにアプリケーション資産の棚卸を行うコンサルティングサービスという性格が強い。これに対して欧米で導入が進むAPMは、適切なIT資産の品質評価やアウトソースの管理レベル向上を目的とした、継続的で自動化された、ユーザー企業の視点に立ったマネジメントシステムである。

APMは、アプリケーションに対するIT投資の事後評価の仕方や、システムインテグレーターの工数見積もりが適性かどうかの判断など、ユーザー企業の最重要課題に応えるものである。APMを用いれば、ソースコードという“動かぬ事実”から、アプリケーション資産を客観的に評価でき、APM算出情報と開発工数・期間などを組み合わせれば、システムインテグレーターの見積もりの妥当性も判断できる。今後APMは、ユーザー企業、システムインテグレーターの両者にとって、より適切なITマネジメントを実現するための基盤技術となるであろう。